

三尖弁輪部起源の PVC に対するカテーテルアブレーションが VF 発作抑制に有効であった Brugada 症候群症例

中野 誠 福田浩二 若山裕司 近藤正輝
モハメド アブデル シャフィー 川名暁子
長谷部雄飛 下川宏明

症例は、生来健康な 43 歳男性である。2007 年 4 月 17 日 19 時、夕食後にテレビを見ている際に心肺停止となった。救急隊により心室細動 (VF) が確認され、AED にて除細動され、前医へ搬送された。神経学的後遺症を残さずに回復し、心精査のため、当科紹介となった。心臓超音波検査上、心機能正常であり、壁運動異常や心筋症を示唆する所見を認めなかった。また、冠動脈造影では冠動脈に有意狭窄を認めず、冠攣縮も誘発されなかったが、ピルシカイニド負荷試験にて Coved 型の波形が出現し、Brugada 症候群の診断となった。植込み型除細動器 (ICD) 植込み術を施行して退院したが、その後も年数回の VF 発作、ICD 適正作動を認めており、いずれも同型の心室期外収縮 (PVC) から VF へ移行していた。2010 年 3 月夕食後に ICD 作動を 2 回きたし、当院救命センターを受診した。受診時の心電図にて、左脚ブロック、上方軸タイプの PVC の頻発を認め、そのうちの 1 発から VF へ移行し、ICD 適正作動で停止した。VF 発作前後で、明らかな Brugada 型心電図を示していなかったが、イソプロテレノール投与にてこの PVC は抑制された。その後入院し、この PVC をターゲットとして、カテーテルアブレーションを施行した。カテーテル中には PVC はほとんど認められず、ペースマップを指標に右室三尖弁輪下壁側で通電を施行した。術後 2 年半が経過したが、現在 PVC の再発を認めず、また、VF による ICD 作動も認めていない。PVC のカテーテルアブレーションが VF 発作の抑制に効果的であった Brugada 症候群症例を経験したので報告する。

Keywords

- Brugada 症候群
- 心室期外収縮
- カテーテルアブレーション

東北大学大学院医学系研究科循環器内科学
(〒 980-8574 宮城県仙台市青葉区星陵町 1-1)

Successful Catheter Ablation to Premature Ventricular Contraction Originated from Tricuspid Valvular Annulus Suppresses Ventricular Fibrillation in Brugada Syndrome

Makoto Nakano, Koji Fukuda, Yuji Wakayama, Masateru Kondo, Mohamed A Shafee, Akiko Kawana, Yuhi Hasebe, Hiroaki Shimokawa